

# 陳舜臣さんを語る会通信

NO.83 Sep. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34  
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」  
Tel.078-911-1671  
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員  
発行日 2022年9月15日  
http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

## 1971年以降の推理短編集2冊『崑崙の河』、『望洋の碑』

本通信No. 77～No. 81で、陳舜臣作品の最初期10年(1961-70)の推理小説を取り上げてきました。

本号では、No. 82に続いて、1971年刊行の推理短編集2冊、『崑崙の河』(1971 三笠書房)と『なにも見えない』(1971 講談社)を紹介いたします。なお、後者は、1987年、文庫本刊行時、『望洋の碑』と改題されています。本号は、文庫版に基づき執筆しました。(編集委員 橘雄三)

『崑崙の河』 「あとがき」より転載  
小見出しと傍線は編集委員の加筆

中国が舞台または、中国人が登場

これまでの私の短編集は、執筆時期のあまりわからない作品が収録される傾向があった。

こんどは、中国が舞台になっている小説、または中国人が登場する小説ということに基づいて、執筆年代にとらわれずにえらんだ。もちろん、過去の短編集に未収録のものばかりである。最も新しいのは、一九七一年四月号の雑誌に発表したものであり、最もふるいのは一九六二年九月号所載のものである。

以前の作品集、ヨコに切断  
本書、タテ割りの断層を見てもらいたい

以前の作品集が、ヨコに切断した作者の魂の断層を示しているとすれば、本書はタテにすっぱりと切りおろしたもので、過去のさまざまな変遷図があらわれているかもしれない。

この機会に、むかしの作品に手を入れてみようとしたが、思うところあって、加筆や削除は最小限度にとどめた。ほとんど原形のままといつてよいだろう。

せっかく、タテ割りの断層をみてもらうのだから、色を塗り直さないほうが、わかりやすいにちがいない。作者としては、いささか気になることもあるが、あえて生

まれたときのままのすがたで、作品をおみせすることにした。

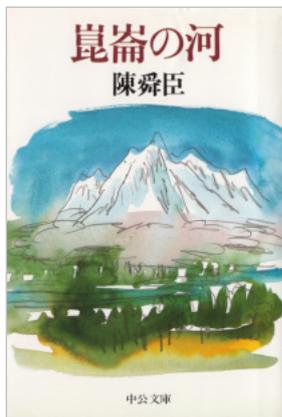
収録にあたって、むかしの作品を読み返し初心に返ったというだけでも、本書をつくった意義があったと思う。

一九七一年七月 陳 舜臣

■中公文庫版キャッチコピー

第二次大戦直後、中国政府に留用され気象観測の仕事をしていた「私」は、学術調査隊の一員として黄河源流地帯を遡り、謎の水難事故に巻き込まれる。紺碧の空と銀白に輝く崑崙の山々を背景に現出した一瞬の惨事は、実は偶発の事故を装った殺人だった。隊長の溺死によって巨万の富を得るのは、「あの人物」しかなかった。

広大な中国大陸と国際都市神戸を舞台に、欲望に憑かれた人間の凄惨な葛藤を浮び上げらせる表題作など、傑作ミステリー五編。



中公文庫版表紙  
カバー画 李庚

■李庚 一九五〇年、中国北京に生まれる。中国の現代著名画家の一人。読売新聞連載『青山一髪』の挿画を担当。陳作品では他に、『聊齋志異考』、『中国詩人伝』の挿画がある。

『崑崙の河』  
主人公、語り手はすべて「私」

『崑崙の河』所収五作の語り手・聞き手は、すべて「私」です。それぞれ別人ですが。

第1話「崑崙の河」

第二次大戦直後、中国政府に留用され気象観測の仕事をしていた「私」(江島融治)は、学術調査隊の一員として黄河源流地帯を遡る。

第2話「紅い蘭泉路」

一九三〇年の秋、歴史学者の卵の「私」(姓は沈)は、最近、甘肅省の臨康で発見された古文書を調べに行くことに。

第3話「枇杷の木の下」

聞き手、狂言回しは、推理小説家の「私」。五人の「私」の内、もっとも、陳舜臣さんらしい。

第4話「鐘馗異聞」

作家の「私」は、船についての知識・情報を得るために、長尾汽船社長・長尾宗治をたびたび訪れる。

第5話「紅い蜘蛛の巣」

貿易会社勤務の「私」(幼馴染からは「衣笠君」「隆ちゃん」と呼ばれている)は、東南アジア地区移動駐在員として、海外出張を命じられる。戦前、神戸の山本通りで、子ども時代を過ごした幼馴染の男女の二十数年後の物語。

## 『崑崙の河』収録各編紹介 ほか

題 初出	『崑崙の河』 各編紹介
崑崙の河 (原題:コンロン)の河 『オール讀物』 昭和44年2月号	第二次大戦直後、中国政府に留用され気象観測の仕事をしていた「私」は、学術調査隊の一員として黄河源流地帯を遡り、謎の水難事故に巻き込まれる。紺碧の空と銀白に輝く崑崙の山々を背景に現出した一瞬の惨事は、実は偶発の事故を装った殺人だった。隊長の溺死によって巨万の富を得るのは、「あの人物」しかなかった。【中公文庫版キャッチコピーより】
赤い蘭泉路 『講談倶楽部』 同37年9月号	1930年の秋、P大学の研究室にいた歴史学者の卵の「私」(姓は沈)は、最近、甘肅省の臨康で発見された古文書を調べに行くことに。話は省都蘭州の旅籠からはじまる。甘肅の大勢は、軍閥、馮玉祥の勢力下にあったが、独立地方軍閥の動きも侮れない状況にあった。そんな中、「私」、重そうな行李を持った交通銀行調査員、60過ぎの陰気くさい老人、肺病患者とおぼしい痩せた男、綿布の行商人、小柄な中年婦人の計六人の客と託送貨物を乗せたトラックは蘭州を出発した。ところが、まる一日のあと、「私」を除いた全員、運転手までもが死んでしまうことに
枇杷の木の下 『小説サンデー毎日』 同46年4月号	神戸の諏訪山金星台の麓に住む上海出身の老夫婦、章映伝と玉貞の数奇な前半生が、章映伝の口から語られる。聞き手、狂言回しは、推理小説家の「私」。収録5作品の語り手、狂言回しの「私」のなかで、もっとも、陳舜臣さんらしい人物。「私」は毎朝、一時間あまり山歩きをするが、章家の前の道がそのコースになっていた。ある日、山歩き中、雷雨に遭い、章家の門の廂に駆け込もうとしたとき、丁度出てきた章映伝と顔を合わせる。家に招き入れられ、彼の話を聞くことに
しょうきいぶん 鍾馗異聞 『小説宝石』 同45年6月号	作家の「私」は、船についての知識・情報を得るために、長尾汽船社長・長尾宗治をたびたび訪れた。長尾家の応接間には、一メートルほどもある鍾馗人形が飾ってあって、主は、「鍾馗さまは私の命の恩人でして」という。以下、「私」は、長尾の回顧談を聞くことに。長尾は、4回続けて一高受験に失敗、ノイローゼ状態になって帰京する。長尾を迎えた中学時代の恩師の、鍾馗にまつわる伝説と訓戒に心を打たれ発奮、進路を変更、天津で事業を営む叔父を頼って中国に渡り、叔父の店を手伝うことに。ところが、今度は失恋で自殺を考える心境に。そして今度も鍾馗に命を救われることに
紅い蜘蛛の巣 『推理ストーリー』 同40年6月号	戦前の神戸の山本通りで幼馴染だった「私」こと衣笠隆、白崎一夫、梁義成の3人と彼らを好きなように繰る混血児のミドリという女性が織りなす物語です。物語の舞台は神戸から、香港、マカオを経て、再び神戸に戻ってきます。「私」が語り手として進行しますので、描かれていることが真実なのかどうかは明かされません。「私」は信用できる語り手なのか「私」が語る内容には「私」の思い込みや勘違いが含まれているのではないかと思いつつ読み進めると、不思議な読後感に包まれる一編です。【ウェブサイト「ひいくんの読書日記」より】

「枇杷の木の下」補足  
別フォント太字は引用文

表題及び、章映伝邸の門札  
「鳳尾庵」を考える

一ヶ所目。

「私」は、日課の山歩きの帰路、章家の前を通るので、屏越しに枇杷の木が見えていました。章家の枇杷は、「私」にとって気にかかる木で、蘇軾の「枇杷の詩」を、ふと頭にうかべます。

翠葉紛として下に垂れ

婆娑たり緑の鳳尾

この句について、註本でしらべてみると、

按ズルニ鳳尾ハ草名ナリ。

一名ヲ金星草トイフ。

とあった。

章家は諏訪山金星台の麓にある。章家が「鳳尾庵」とつけたのは、鳳尾の列名の金星草と、地名の金星台を結びつけた、一種の遊びであろう。

ついでに辞書をしらべると、  
鳳尾草 羊歯類多年生草木とある。

二ヶ所目。

赤ん坊のとき、上海の大富豪・蘇嘉棟に買い取られ、女中として働くことになった玉



沈石田「枇杷の木」イメージ



鳳尾草

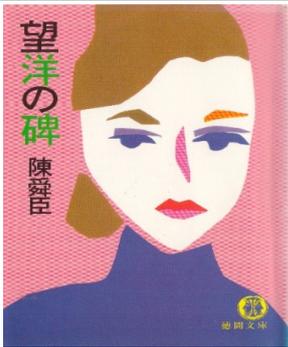
貞の持ち場は、最も重要な客を通す部屋、「枇杷の間」であった。

部屋の名のいわれは、そこに明代の名画家沈石田(しんせきでん)えがくところの枇杷の木の絹本墨画の大きな軸がかかっていたからである。

■右の画像の落款「沈周」は、「沈石田」の本名

最後は、章家の枇杷の木の下でおこった哀しい出来事に続き、すべてが明かされます。

文庫版『<sup>ぼうよう いしづみ</sup>望洋の碑』(単行本表題は『なにも見えない』) 各編紹介

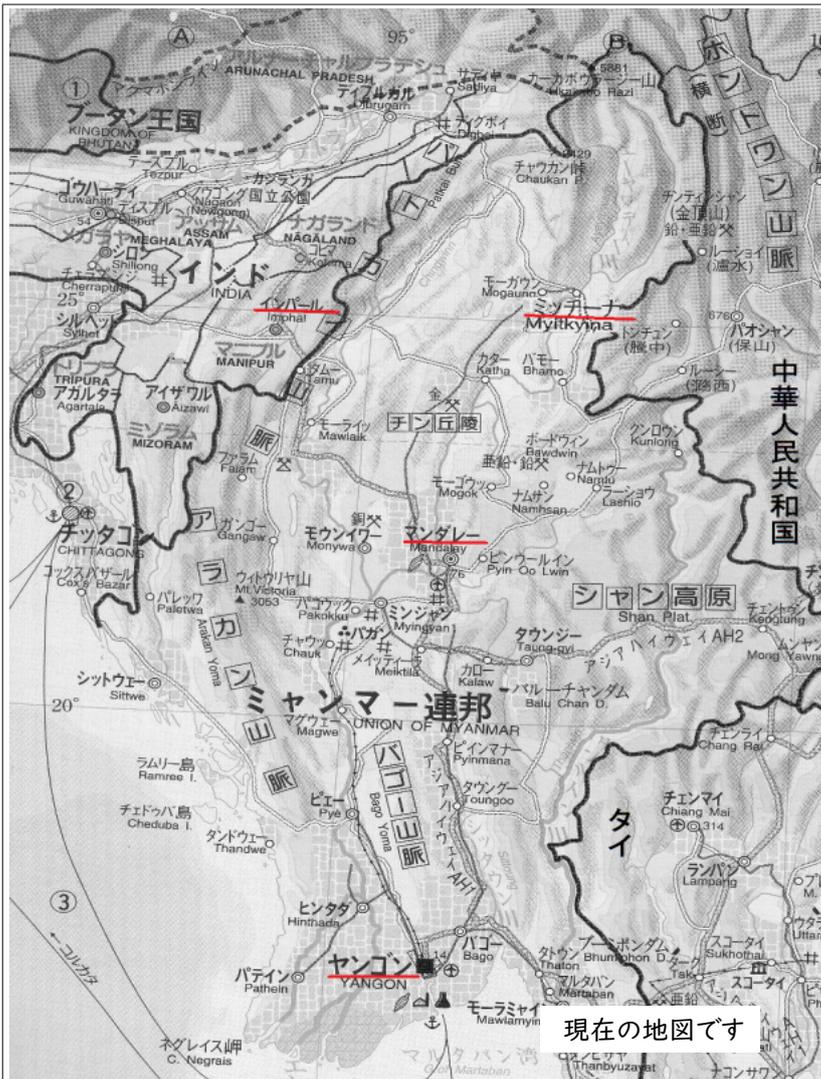
題 初出	『望洋の碑』 各編紹介 (徳間文庫版、武蔵野次郎氏の「解説」をもとに)	
蟬が鳴く 『オール讀物』 昭和46年9月号	作中時間は1971年。物語は、推理小説作家の「私」が、有馬温泉に滞在する曹夫人を訪ね、回顧談を聞く場面から始まる。曹夫人は、上海の大富豪張家の娘として生まれ、これも大財閥の曹家に嫁いだ人である。そして、同席した、夫人の息子で曹財閥の後継者である曹修耕から、1937年、彼が4歳の時、何者かに誘拐され、高額の身代金を奪取されたという事件を聞かされる。このあと、「私」は、曹修耕の依頼で、この事件で、彼の釈放に骨を折ったという、当時の国府軍の青年将校、蔡成器に会いに上京する	
なにも見えない 『小説現代』 同46年5月号	「私」と「私」の知人で、ミートキーナの戦いの生き残りという片岡章治との会話のなかで、ビルマ戦線の一コマ、1944年夏、ミートキーナを舞台に展開した数奇な物語が明らかになっていく。他の登場人物●ワニ皮製品の店「永南公司」の店主夫人フォン：ミートキーナ生まれ。父は雑穀の集荷を業とする華僑の商人。ビルマ人の母は早くに亡くなる。ミートキーナが、日本軍と連合軍の戦場となっていたとき、父は、連合軍への内通者という容疑で日本軍に連行される。傷心、不安気なフォンの力になったのが、今の夫、クエであったが、さて…	
ヒマラヤ・クラブ 『小説サンデー毎日』 同45年11月号	この作品は、アリバイ崩しテーマの本格推理仕立てであり、題材の面白さ(東京丸の内ビルの中で行われている外国人連中の戦友会をテーマに採るといふ点が異色の面白さになっている)で、興味深く読ませる。このビルの中で貿易商を営むジョン・セシルという男が、殺害されるという殺人事件が発生し、クラブの会員が疑われることになるが、有力容疑者と目された二世のヤマダにまつわるアリバイが、実はもう一つの重大なアリバイを構成していたという読者の意表を突くアリバイ崩しの本格推理になっている ■空の援蔣ルート 宝石密輸	
望洋の碑 『別冊小説現代』 同46年初夏号	主人公は推理小説作家の「私」、姓は陳、25歳。「私」が、1949年、台湾に一時帰省中の出来事。台北市の近郷にある古い町の地主の邸内にある石碑にまつわるミステリーであるが、〈…その門をはいった真正面に、約三メートル四方に石垣を組み、そのうえに大きな石碑が立っていた。まるで闖入して来る人間に、大手をひろげて通せんぼうをしているようだ。〉と描写されている望洋の碑という石碑そのものにも異国情趣に充ちた面白さが感じられるが、それに驚くべき細工が施されていて、殺人の道具にもなったというラストのナゾ解きに尽きぬ妙味と面白さがある (徳間文庫版表紙 →)	
ダイヤモンド姫 『小説新潮』 同45年5月号	この作品も、題材の異色さと情感に満ちたストーリー展開で心にのこる佳編に仕上がっている。作者のホームグラウンドである神戸を舞台に展開する物語であるから、神戸のローカル色はフルに捉えられている。神戸で雑貨貿易商を営み、併せて中華料理店やボーリング場の株主でもある華僑の成功者の宋棟忠という人物が、満州事変が勃発した昭和初期の頃、越南の世祖第六代の子孫であった美卿内親王とよぶ美女を預って世話することになったが、その裏には隠された秘密があった…	
追跡の報酬 『小説サンデー毎日』 同46年9月号	中国青銅器の盗掘・密売にまつわる数奇な物語が展開される。「私」と旧知の林選材の対話で話が始まる。時代は、殷墟の発掘が進む1930年ころ。主な登場人物●林致銘：林選材の父。北京の中央政府から、盗掘団の密売ルートをさぐるという特命を帯び、河南省安陽、殷墟の発掘現場に派遣された、うわべは警備隊の一員。安陽で王鳳秀と出会い恋をする。●王鳳秀：書画の偽物作りを本業とする安陽の骨董店・尚遠堂の娘。密売ルートを追う林致銘と、父が密売グループに加担する王鳳秀の恋を中心にストーリーは展開するが…	

《インド→中国、空輸による宝石の密輸》

戦時中、連合軍が中華民国の蒋介石政権を軍事援助するための援蔣ルートの一つに、インドから中国の重慶や昆明などに空輸するルートがあった。陳舜臣さんは、このルートを使って宝石の密輸が行われていたというストーリーをいくつもの作品で使っている。

執筆順では、『夜の歯車』「夜の歯車」(初出：『小説宝石』1968年盛夏特別号)本通信No. 82、『望洋の碑』「ヒマラヤ・クラブ」(初出：『小説サンデー毎日』1970年11月号)本通信No. 83、『五台山清涼寺』「虎たちの宝」(初出：『小説現代』1978年10月号)本通信No. 67、『相思青花』(初出：『波の残影』1984. 6. 12~85. 6. 15 新潟日報連載)本通信No. 44である。

# 『望洋の碑』『なにも見えない』時代背景・舞台の補足



陳作品で、太平洋戦争中の東南アジアの戦場が詳述されることはめずらしい。私(橋)自身、疎いで、「なにも見えない」の時代背景並びに舞台について、改めて補足してみました。

### インパール作戦

第二次世界大戦(大東亜戦争)のビルマ戦線において、一九四四年(昭和19年)三月に日本軍により開始、七月初旬まで継続された、イギリス領インド帝国北東部の都

市であるインパール攻略を目指した作戦のことである。ビルマ防衛のための攻撃防衛や援蒋ルートに難があり、撤退時に特に多くの犠牲を出したことから、現在では「無謀な作戦」の代名詞としてしばしば引用され、日本軍における「史上最悪の作戦」と言われることもある。

■援蒋(えんしょう)ルートというのは、日中戦争期、中華民国の蒋介石政権を軍事援助するために、

### ミイトキーナの戦い

イギリス、アメリカ、ソ連などが用いた輸送路のことで、援助国・使用時期、陸路・空路などにより、いくつものルートがあった。ミイトキーナ(陳作品ではミイトキーナと表記)は、ラングーン(現地名はヤンゴン)で陸揚げした物資を鉄道とトラックで雲南省の昆明まで運ぶルート上の要衝。

一九四四年にビルマのミイトキーナ(ミッチャーナ)に対する当時の

現在の地図です

日本での呼称)とその周辺地域の支配をめぐる日本軍とアメリカ軍・国民革命軍との戦闘。

当初は、この地を死守する日本軍が優勢であったが、連合軍側との物量差に加え、増援部隊の派遣がままならなかったことで次第に窮地に陥り、最終的に、連合軍に制圧された。

このミイトキーナ(陳作品ではミイトキーナと表記)の戦いが、「なにも見えない」の時代背景・舞台になっています。

### 台湾を舞台にした「望洋の碑」

本通信No74で、

陳舜臣さんの作品で、台湾を舞台にした長編は、『怒りの菩薩』しか思い浮かばないのですが、短編では、『胡蝶の陣』『シンカンの若者』(本通信No67)、『三本松伝説』『祖師廟にて』(本通信No71)と、今回取り上げた『紅蓮亭の狂女』『鉛色の顔』があります。私が読んでいないだけで、もっとありそうな気がします。

と、書きましたが、やはり、ありました。『望洋の碑』『望洋の碑』です。

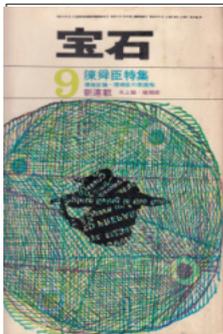
この度、陳舜臣さんの台湾を舞台とした作品に「望洋の碑」が加わりましたが、膨大な陳舜臣作品群からすると、まだまだ少ない。

左の詰問状がトラウマになっているのでしょうか。

### 自作を語る「怒りの菩薩」

故郷の台湾を舞台にした。菩薩村は現在の観音村がモデルである。

観音村出身の留学生から「拝啓陳舜臣殿」という七十枚の詰問状を受取った。作者の政治意識を弾劾したものである。つらい。エンターテイメントの作品には台湾を使うまい、と、心に誓った。



(『宝石』昭和38年9月号)